

(実践研究) 国語科教科書における言語活動に関する一考察

— 『国語総合』の古文教材を中心に—

松村 美奈 (非常勤講師)

はじめに

平成21年3月に高等学校国語科新学習指導要領が告示され、平成25年度から全ての検定教科書が一新した。新学習指導要領の主な改訂のポイントは「言語活動の充実」と「言語文化に関する指導の重視」である。特に「言語活動」を充実させることについては、各教科書が工夫を凝らしており、これからの国語科教員も指導する上で常に考慮していかなくてはならない点である。

そこで本稿では、『国語総合』科目に限定し、教科書に掲載される教材(古文)についての「言語活動」部分を調査、整理する。また、教職課程「国語科教育法」を履修した学生の古文教材への向き合い方を紹介し、今後の古文授業のあり方の可能性と課題を探る。

1 新学習指導要領の改訂ポイント

高等学校国語科の改訂についての具体的事項として、以下のような記述がある。(傍線は筆者による。以下同じ。)

「国語総合」は、現行の「国語総合」の内容を改善したものとする。実社会で活用できる国語の能力を身に付けるため、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの学習が総合的に行われるよう、内容を改善する。

その際、特に、文章や資料等を的確に理解し、論理的に考え、話したり書

いたりする能力を育成することや、我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度の育成を通して、感性や情緒をはぐくむことを重視する。

また、「国語総合」の改訂要点としては、以下のように記される。

読むことの指導では、読む能力を育成するとともに、読書の幅を広げ、読書の習慣を養うことに配慮している。読むことの指導のうち、古典と近代以降の文章との授業の割合は、おおむね同等とすることを目安として、生徒の実態に応じて適切に定めるようにしている。古典における古文と漢文との割合は、一方に偏らないようにしている。古典の教材には、古典に関連する近代以降の文章を含めることを明示している。

新たに置いた〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕では、我が国の文化と外国の文化との関係に気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げることを示すとともに、従前、〔言語事項〕として示していた言葉のきまり、言葉の成り立ち、表現の特色、言語の役割、文や文章の組み立て、語句、語彙、表記、漢字の読み書きに関することも取り上げている。

こうしたことを踏まえた「言語活動例」と

して、「ア. 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること」という提示がある。これは創作に関する事項として新設されている。解説には次のように記される。

小説や随筆などを読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりするためには、文章を客観的分析的に読む必要がある。文章を繰り返して読み、人物、情景などについてのイメージを具体的にもったり、人間、社会、自然などに対する書き手や文章中の人物の考えや感情を想像したりすることで、文章の内容や表現を一層深くとらえることができる。(中略)

「古典を現代の物語に書き換え」る過程では、古典の言葉と現代の言葉との関係を意識したり、古典の書き手や文章中の人々と、現代の人々との共通点や相違点を考えたりすることができる。それが、人間、社会、自然などに対する様々な時代の人々のものの見方、感じ方、考え方についての理解を深めることになる。

これまで、上記のような記述は旧指導要領には全く書かれていない。一般的に古文の授業は本文を読み、品詞分解などをして古語を理解しながら、内容を理解していくことが授業の流れであったといえるが、上記のような改訂部分を参照すると、常に現代を意識して古文理解させていくことが求められているということが分かる。そのことを明確に記述しているのが「教材に関する事項」に関する「内

容の取り扱い」についての部分である。

ア. 古典の教材については、表記を工夫し、注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用い、特に漢文については訓点を付け、必要に応じて書き下し文を用いるなど理解しやすいようにすること。また、古典に関連する近代以降の文章を含めること。

こうした記述も旧学習指導要領には全く見られない内容である。実際にいくつかの教科書を概観すると、「源氏物語」のマンガなどが紹介されていたりしており、実験的な指示ともいえるのではないかと思われる。

2 教科書『国語総合』について—「古文」の場合—

今回、全国で使用されている平成25年度検定教科書『国語総合』（22冊）について、古文教材に限定して全て調査した。教材についてはほとんど変化がない。必ず取り上げられる教材、いわゆる定番教材は健在なままである。

〈定番教材の一例〉

『宇治拾遺物語』『児のそら寝』『絵仏師良秀』『竹取物語』『かぐや姫のおひたち』等
『伊勢物語』『芥川』『東下り』『筒井筒』『徒然草』『つれづれなるままに』『九月二十日のこと』
『土佐日記』『門出』『帰京』
『平家物語』『祇園精舎』『木曾の最期』
『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』
『奥の細道』『旅立ち』『平泉』『立石寺』
これらの教材をこれからどのように指導し

ていくかが、国語科教員の工夫のしどころとなる。新学習指導要領「国語総合」C読むことについての解説で、

古典の学習は、古文、漢文の現代語訳や文法的な説明に終始するものであってはならない。古典を読むことへの意欲を喚起するためには、古典を学ぶことの意義を認識させることが大切である。(略)

教材も古典としての古文と漢文の原文のみならず、古典に関連する近代以降の文章も取り上げるなどの工夫が必要となる。とある。この記述に従って、各教科書にはさまざまな工夫が凝らされている。顕著な変化は、どの教科書も現代語で解説したコラムが充実しているという点である。特に昔の「結婚」「四季・美意識」「和歌」「月と暦」「変体仮名」「旅」など、各項目について生徒の興味を喚起するように詳細に説明されている。これらは全て「現代」と比較することが可能であり、生徒が古文を身近なものとして感じられるように工夫がなされていることが分かる。これまでは個々の教員の判断で文化的な部分は紹介したり、資料を準備したりしてきたが、あらかじめコラムとして紹介されていることで、教員はスムーズに教材と併せて説明したり、生徒達に調べさせたりすることができるようになるだろう。こうした充実したコラムにいかに肉付けした説明を施せるかがこれからの教員の資質の差となっていくはずである。

また、大きな改変としては、和歌教材の部分である。例えば大修館書店『新編国語総合』では、『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌

集』など、定番教材を『百人一首』からの歌との比較ができるように並列し、尚且つ大岡信の現代語による解釈も載せるといものである。他にも口語訳を和歌の原文とともに掲載している教科書は少なくなかった。これは、現代の文章と照らし合わせ、現代から考えていくという工夫である。確かに和歌の現代語訳は揺れが生じる。一語の訳し方を検討することに和歌の醍醐味があるといえるが、低学力の生徒は初めから見向きもしない傾向がある。今回のように、ある程度現代語訳を示すことによって、歌の内容を理解し、現代に置き換えて考えることにより、和歌への興味を喚起することにつながるだろう。

そこで、各教科書会社の古文教材に限定し、最終ページに【資料】として「言語活動」内容を調査・整理した。

東京書籍の教科書編集に携わった吉田茂は以下のように述べる。¹

古文に関しては、むしろ言語活動重視の姿勢で編集しました。というのは、古典嫌い、古典の勉強をするのがしんどいという生徒がいる、それを切り崩す方法として、言語活動を一つの突破口にできないかと考えたからです。(中略)新指導要領で強調されている「想像力」、思いめぐらす気持ち、そういうものも動員しながら、登場人物の気持ちを想像して自由に書いてみよう、というような具体的な言語活動を設定して生徒が動きやすい環境を整えるとか、書くことを通して古典を自分たちの問題として、(略)感じ取ってほしいということを意識しました。

もう一つは、例えば、桜をめぐる日本人の心というものには、古代と現代とでは異なるところも共通するところもあると思いますが、その桜をテーマに言語活動を設け、そこにどんな日本人の姿、あるいは日本人のものの考え方、心のありようが見いだせるか、そういうことを考えるきっかけになる活動を盛り込みました。このような言語活動を行うことによって、現代に生きる古典、あるいは古典への親しみということを強調してみようと考えました。

従来の古文授業では、教員の説明を受身で聞くだけの場合が多かったが、吉田は、生徒を動かすことが大切だと述べる。確かに自らが考えて文章を書くという作業を通して、積極的に授業に参加する姿勢が身につくといえる。「言語活動」は自ら考えるきっかけという位置付けとしてとらえるべきなのである。

また、加藤郁夫は古典教育について以下のように述べる。²

古典は、日本語教育（国語教育）という大きな枠組みの中でとらえることが重要である。現代語と無関係に古典に触れさせていけばよいのではない。現代語との、そして現代とのつながりを大切にしながら、生徒の日本語（母語）の知識・能力を高め、論理的思考力・認識力を発達させていく、古典教育をそのようにとらえていくのである。古典教育は、従来このような観点では取り組まれてこなかった。特に高校段階では「古典」はあたかも別の言語を習うかのように教えられ、

文法事項を「たたき込む」ような教え方がされてきた面がある。逆に中学段階では古典はむつかしいからということで、全訳がついたものを併せ用いたり、音読・暗唱に終始したりと、古典の魅力が伝えられないままに軽く扱われてきた面がある。どちらも古典を日本語教育という位置づけでとらえる点に弱さがあった。（後略）

加藤は日本語の力を鍛えるための授業として古典を位置づけることを提案している。また、教師自身がおもしろいと思える授業を創ることも強調している。この指摘は正しいし、これから古文授業を作り上げていく過程で重要な観点となってくるだろう。こうした考えをふまえ、これからの教員は自らの授業に工夫を凝らしていかななくてはならない。

次にこれから教員を目指す学生（国語科教育法履修者）たちの古文に対する考え方を概観してみたい。

3 学生達の考える古文授業

—古文への認識—

先日、国語科教員を目指す学生たちに古典に関するアンケートを行った。³内容は以下の通りである。

1. 古文は好きですか yes no
2. 漢文は好きですか yes no
3. どんな点が不満だったのか、またはどのような授業をこれまでうけてきたかを説明して下さい。
4. 中学校・高等学校で印象に残っている教材は何か。教えて下さい。

5. 古典嫌いが増えているが、どのような工夫で改善できると思うか。意見を述べて下さい。

結果は、古文が好きと答えた者は13名、嫌いだと答えた者は10名。漢文が好きと答えた者は20名、嫌いだと答えた者は3名であった。

また高校時代に受けた古文・漢文の授業について不満はありますか？との問いにはyesが11名。Noが12名であった。それぞれ約50%ずつであるというのはとてもおもしろい結果である。国語科教員を目指す者の中にも、「嫌い」とする学生が半数いて、これまで受けた授業についてもそれぞれ不満に思っていたようである。その理由として以下のような意見が集まったので紹介する。

- ・ただ文を訳していただけだった。
- ・品詞分解ばかりで内容を訳すだけだった。英語の授業を受けているようだった。
- ・授業がお経みたいで嫌だった。とにかく眠い。
- ・単語を覚えるのが大変。
- ・「参考書を読めばわかる」とおっしゃることが多く、詳しい説明や用例をもっと多く教わりたかった。
- ・ほぼ暗記状態。
- ・古文は特に動詞の活用を見分けることしかなかった。
- ・説明のスピードが速かった。
- ・間違えると怒られる。
- ・古文は苦手意識があり、活用形や口語訳するのが苦手。

こうした不満意見の一方で、淡々とした品詞分解の授業方法でも基礎力が身につく、非

常にためになったという感想を述べ、オーソドックスだからこそ「おもしろい」と感じている学生もいた。ということは、全て教員の指導の仕方でも決まるといふことの証明でもある。

「古典を楽しく学ぶコツ」とは、よい授業とは、生徒自らが、学ぶことに意味を見いだせる授業とし、おもしろくて、楽しくて、よくわかって、力がつく古文の授業をつくるためのコツは、明確な「学習目標」とそのときの「生徒の実態」とを対比させながら授業を組み立てることです。具体的には、古文を通して学ぶこと(=生徒の目標)と、生徒たちや今の社会の常識(=生徒の実態)とのずれや違いを、教師の説明ではなく、生徒自身に気付かせることであるという。⁴全ては教員の授業に対する向き合い方であることは、学生達も実感として理解しているようであった。

このアンケートの最後5に、教員を目指す者として、改善案の提示を求めたところ、多くの意見を提示してくれたので、ここに紹介する。

- ・古典作品をおもしろおかしく紹介する。(面白い話を紹介する・ユーモアをまじえる・楽しく教える)
- ・「古典は古臭い・何の役に立つのだ」と思っている人に興味・関心が湧かせるようにしなければならない。
- ・その時代の背景や当時の人々の考え方などをふまえて説明する。(映像を見せたりする)
- ・日常に古文を取り入れてみたりする。
- ・現代に置き換えながら説明をする。
- ・古典の時代と現代の共通点を教えたりして

少しでも身近に感じてもらう。

・和歌を自分で作ることを体験させつつ、古文につなげていく。

・文法を丁寧に解説する。(語彙・文法の解説ばかりにならないよう注意する)

・文法のポイントを毎時間に教えていくようにする。

彼らは自らの体験をもとに、古典の授業に何が必要なのかを考えてくれた。この意見を総括すると、古典を「面白く教えるための工夫の必要性」を重視していることが伺える。

ここでの「面白い」とは何か。おそらく強い興味付けのことだと思われる。学生達は自分の経験から「面白い」授業をすれば、古典嫌いはいは減少できると考えているのである。このアンケートに協力してくれた学生達には是非これから「面白い」古典授業案を検討してもらう予定である。

次に、昨年度(平成24年度)国語科教育法履修者数名が古文教材に取り組み、自分たちなりの授業を構想した。「花は盛りに」・「児のそら寝」・「木曾の最期」・「検非違使忠明」など定番教材で、どのように授業をつくるのか。実際に学生達が苦心しながらも様々な工夫をしており、「言語活動」をうまく取り入れている例をいくつかここに紹介する。

【例1】「児のそら寝」の場合⁵

古文の基礎を固める位置付けの授業で、それぞれ工夫を凝らしていた。

本文にはない「心内」のセリフを考える。お話のその後を考えて発表する・・・など、ただ読むのではなく、創作的要素をふんだんに盛り込んだ構想である。展開の仕方に問題は

あるものの、こちらが思いつかないようなことを考えてきて、非常に面白いものであった。

【例2】「検非違使忠明」の場合⁶

「清水寺という誰もが一度は見聞きしたことのある場所での説話を読んでもらい、おもしろさを味わい、古典の世界に親しんでほしい。」という教材観のもと、ワークシートを用いて「忠明はどのように谷底に落ちていったのだろう?絵に描いてみよう」という枠を設け、実際に絵を描かせイメージを膨らませるといふ工夫を凝らしている。その理由として「教師が解説を淡々とする授業は、生徒の興味を引かないし、つまらない授業になる」からとしている。この他にも発問も考え、一方的にならないように考えている点がよく見えた。

【例3】「花は盛りに」の場合⁷

作品読解の導入として、桜の「つぼみ」「満開」「散った桜」三種類の写真を見せ、生徒自身にどの写真の桜が好きかを考えさせることを取り入れている。それは「古人と同じものを見ているのに、異なる見方をしているということに気付かせる為」とのことである。生徒には、「どの桜が好きか、またその理由も発言する」との計画をたて、これから読み進めていく話へと自然に誘う展開をつくり出していた。模擬授業の聞き役側の学生達もハッとした様子であった。

【例4】「なよ竹のかぐや姫」の場合⁸

導入としてまず「かぐや姫」を昔話で読ま

せることで、古文を身近に感じさせようと試みている。こうすることで、大まかなあらすじを生徒たちが理解できる。隣の席の生徒同士で本文を読み合い、音読も取り入れながら本文理解に導いていこうとする工夫がみられた。この授業を構想した学生達は「文法が基本である」という考えのもと、黒板に直接書くのではなく、丁寧に模造紙に教科書本文を書き出し、重要ポイントを見やすくすることで文法指導を行っていた。授業準備周到さに感心させられる授業作りであった。

【例5】「木曾の最期」の場合⁹

「平家物語」の一節であるので、群読を中心に授業を展開するとともに、描写される装束を詳細に生徒に見せる工夫が施されている。資料集や教科書に掲載されているものではなく、掲載がないものはすべて教員側が準備するという取り組み。そして装束を書き込むワークシートを作成した。生徒役も知らない装束名を覚えることができ、喜んで参加するという様子であった。

今回は、「言語活動」をふまえて、工夫を凝らそうとしているものを例としてあげたが、他にも基本的に忠実に緻密な文法指導を丁寧に教えようとするもの等非常に勉強になる構想も多くあった。彼らの工夫や古文指導への向き合い方は非常に真っ当であり、今後を期待させるものばかりである。高校の生徒を前にして実践をしたわけではないが、若い教員の卵たちが、工夫を凝らして「教える」ということを考える姿勢をこのまま貫かれてい

くことを強く望む。

4 まとめ—これからの可能性—

本稿では、『国語総合』の教科書の内容を調査しつつ、これからの古文指導について考察した。また、教職課程国語科教育法履修者の構想案を例として、学生たちが「面白い」授業を考えるとはどういうことなのかを概観し、これからの古文指導の可能性を探ってきた。

古文の教材は現代文よりも「定番化」しているといつてよい。同じ教材ばかりを扱って、指導がマンネリ化することもある。しかし、これからの若い教員がその感性と教材研究の努力、工夫を凝らすことで、その不安は払拭されることを実感した。教科書教材を上手に工夫しながら、尚且つ教員独自の個性は、それは教材をどのように味付けして教えるか、どのように料理するかによって教員独自の個性が出るのである。「味付け」「料理」する準備こそが「教材研究」に他ならない。徹底的な教材研究を経て、生徒が「面白い」と感じる授業を作り上げていかななくてはならない。学生の中には、「サブカルチャーを利用したい」という感想を述べた者がいたが、これも一つの方法なのかもしれない。新しい時代の教員が、どう工夫を凝らしていくのか、我々の発想では考えられないような点からのアプローチを期待したい。

ただし、課題もある。文法指導は指導要領でも重要な位置を占めているので全く触れないわけにはいかない。また、正しい解釈を導くためには文語文法の基礎を学習することは

不可欠である。退屈とされる文法指導をどのように指導することが「楽しく」古文を学ぶことにつながるのか。このことについても是非学生達と共に考えていかななくてはならない大切な課題なのである。

(凡例) 文中の学習指導要領引用部分は『高等学校学習指導要領解説 国語編』平成22年6月 文部科学省 を使用した。

【注】

- 1 山本伸二(司会)、小原広行、村田勇司、吉田茂「座談会 新指導要領とこれからの国語科指導—新課程教科書にこめた思いを語る—」『ニューサポート高校国語』vol.17 2012年4月
- 2 加藤郁夫『日本語の力を鍛える「古典」の授業』明治図書 2010年9月
- 3 2013年度後期「国語科教育法」履修学生23名に対し実施した。
- 4 楽しくつくる古典の授業3「古文を楽しく学ぶコツ—生徒自身に気付かせよう—」『ニューサポート高校国語』vol.17 2012年4月
- 5 2012年度後期「国語科教育法」履修学生 岩井文香・杉原祐子・三橋菜由子の発表とレポート内容を再構成した。
- 6 2012年度後期「国語科教育法」履修学生 倉橋里奈の発表とレポートを再構成した。
- 7 2012年度後期「国語科教育法」履修学生 森田綾香の発表とレポートを再構成した。
- 8 2012年度後期「国語科教育法」履修学生 池谷綾香・鈴木希望・門名美幸の発表とレポートを再構成した。
- 9 2012年度後期「国語科教育法」履修学生 高木悠理菜・宮内祐未の発表とレポートを再構成した。

(付記) 「国語科教育法」授業内で発表しレポートを提出した学生及びアンケートにご協力頂いた学生の皆さんに深謝いたします。

【資料】

教科書番号	★特徴的な表現コラム・○言語活動の内容
301	○「古典と現代の歌を読み比べる」○「古典を自分の言葉で書き換える」
302・304	○「古典を自分の言葉で書き換える」○「桜の歌を読み比べる」
306	★井筒の読み比べ（古典の扉）
307	★（古典の扉—結婚・四季・美意識・月と暦・旅など）
308	★コラム俵万智「筒井筒について」
309・310	○「ものはづけを作ろう」○「古典の世界を現代によみがえらせよう」
311・313	★古文の扉・コラム大岡信「和歌」という言葉の意味
314	★山口仲美「なんてステキな光景なの」★永積安明「壇の浦の戦い」
316	★読み継がれる古典 松村栄子「友人の条件」
318・320	★小川洋子「自分のために詠まれた歌」江國香織「月からの迎え」
322	（とくになし）
323	★「物語を読む」という現代文
325・326 327	○「竹取物語」の求婚譚を調べる○「読み比べる—大和物語」★古典の和歌を現代の言葉で書き換える
328	○古典の和歌を現代の言葉で書き換える
330・331	★犬養孝「古典の魅力—現代からの視点『言霊』」・コラム

301『新編国語総合』302『精選国語総合』304『国語総合古典編』（東京書籍）

306『高等学校国語総合古典編』307『精選国語総合』308『明解国語総合』（三省堂）

309『国語総合』310『新編国語総合』（教育出版）

311『国語総合古典編』313『精選国語総合』314『新編国語総合』（大修館書店）

316『国語総合古典編』（数研出版）

318『高等学校国語総合』320『精選国語総合古典編』（明治書院）

322『精選国語総合古典編』323『国語総合』（筑摩書房）

325『高等学校新訂国語総合古典編』326『高等学校国語総合』327『高等学校標準国語総合』328『高等学校新編国語総合』（第一学習社）

330『探求国語総合古典編』331『国語総合』（桐原書店）

